

丹後機業の動き

産地復興に向け、このピンチをチャンスに！

- 政府は6月の月例経済報告において、『景気は、厳しい状況にあるものの、一部に持ち直しの動きがみられる』とし、従来の「悪化」の表現を削除し、実質的に「景気底打ち宣言」を出した。また、日銀発表の6月企業短期経済観測調査(短観)では、企業の景況感を示す業況判断指数(DI)が大企業製造業で10ポイント上向き平成18年12月調査以来2年半ぶりに改善するなど、日本経済の急速な悪化に歯止めがかかり薄日が差してきた格好となった。
- しかしながら、5月の完全失業率は5%台で、今後の雇用情勢も一層の悪化が懸念される。更に、雇用形態の多様化や今夏ボーナスの大幅マイナスなど、賃金情勢も一向に改善されてない。こうなると、生活防衛から消費者の買い控えが強まり、景気を下支えする一つである個人消費は落ち込むこととなる。事実、百貨店・スーパーの売上高は、ここ数ヶ月連続で低迷したままである。また、地域経済、特に中小・零細企業ではまだまだ回復の実感はなく、明るい兆しは全く見えていない。
- 値の張る不急不要品の一つともいえる和装品にとって、不況の影響は、いち早く到来し、その回復は最も遅くなる。長引く和装不振の中であって、昨年後半には日本も世界同時不況に巻き込まれた。また、今年5月には関西圏で新型インフルエンザが発生し、催事が中止・延期されたり、店頭販売での客足が遠のくなど、和装業界にとってはダブルパンチとなった。
- こうした不況下にあっても、価値と価格のバランスにこだわり、割安感ある魅力的な新商品を出し続けることで業績を伸ばす「ユニクロ」などの企業が存在するのも事実である。丹後産地においては、和装復興に向け、流行・時勢を捉え消費者目線に立った価値ある「ものづくり」を目指し、ピンチをチャンスに変えるべく、そのための意識改革と体制づくりに取り組んでいく必要がある。

(調査時期：平成21年 6月上旬～ 6月中旬)

(調査機関：(財)京都産業21 北部支援センター)

【ちりめん(白生地)】

- 平成21年(1~6月)の生産数量は25.0万反で、前年比71.6%(無地59.9%・紋75.0%)となった。昨年後半から強まった減産は今年の年初より一段と顕著になり、特に無地では1月から6ヶ月連続で月産1万反を割っている。今後、こうした状況に改善が見られなければ、平成21年における年間生産数量50万反割れも危惧される。
- 財務省の貿易統計によると、平成21年(1~5月)の小幅白生地輸入数量(無地及び紋)は15.9万反で、前年比63.0%となっている。4割近い大幅減となったのは、昨年前半が一昨年比3割増と比較的好調に推移したことへの反動もあるが、引き続き和装不振に加え、景況の悪化に未だ底打ち感を見出せず、先行き見通しが立たないことが要因であろう。なお、雇用・消費意欲等の改善にはもう少し時間を要するとの見方が強く、この低迷基調は今後しばらく続くものと思われる。
- 小売販売が不振を極めるも流通在庫は依然として過剰であり、産地機業は総じて消化仕入への対応に終始し、大幅減産(前年比3割減)が続いている。なお、企画品の一部に動きが見られるものの、定番品は引き続き低調で、特に振袖は荷余り感が強く、悪さが目立つ。今後、夏場の不需要期に向け、更なる減産が心配されるところである。減産に加え、生地価圧迫も一段と強まっており、一部の京都問屋筋では在庫減らしのための投げ売り(見切販売)が見られ「白生地は、丹後で買うより京都で買った方が安い」といった奇妙な話も聞かれる。今の丹後産地は、「売れば損、売らねば在庫」といった状態に陥っている。こうした中、減産対応として固定経費節減や稼働効率確保を図るため、一斉休業日を設けたり、完全週休2~3日制に踏み切る法人企業も多く、この機会に「多品種・小ロット要請に対応可能な体制・人づくりの研修を実施している」と話す若手経営者もあった。

【帯地】

- 平成21年(1~3月)の西陣帯地生産数量は、22.2万本で前年比97.0%となっている。
 - 川下販売での売れ筋は、高級品と下格値頃品に二極化しているが、高級品においても景気の悪化やローン規制等から、その上代は下落してきている。
 - 産地では4、5月以降急速に減産傾向となり、前年比3割減とする機業も多い。こうした中、振袖帯で、目新しい新柄作りへの取組によって良好な織機稼働を維持する産地機業も一部にある。
 - 一般的な出機(日4万越/台)の月收入は一台4万円程度と思われ、減産に加え工賃安も深刻である。なお、織手の高齢化から、織注文に対応できる技術ある機屋に仕事が集中する傾向が窺われる。
- ### 【広幅織物】
- 服地では、正絹は小ロット発注がスポット的にある程度で、発注時期もバラバラであり、シーズン性は見られない。ポリちりは、需要層の高齢化、販路の減少・縮小、加えてあまりエコ的でないとの認識もあり、依然として先細りが止まらない。
 - ネクタイは、今秋冬物が例年より1ヶ月ほど遅く5月中旬から始まったが、受注量はやや予想を下回ったようである。秋口からの来春物については、今春物販売が大苦戦で在庫も多いことから、受注減は避けられないと見る向きが多い。
 - カーシートは、3月までは20年度分の受注残があったものの、4月以降は激減し、受注皆無の機業も出てきている。先行き見通しが全く立たないことから、多角的に、かつ多用途な生地素材への転換を図る動きが見られる。

【小物他】

- 風呂敷では、正絹は実需分のみ底堅く推移し、低位安定といったところである。一方、レーヨン300番は春先から激減し、極端な不振状態にある。
- 帯揚、衿等の和装小物は、和装販売の低迷そのままに、引き続き減産傾向にある。